



三島由紀夫全集

20

戯 曲

I

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第二十卷

昭和五十年二月二十日印刷

昭和五十年二月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

三島由紀夫



発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話業務部(〇三)二六六一五一 編集部二六六一五四一一

定価 二五〇〇円

第二十二回配本(全35巻・補巻1)

Copyright © 1975 YŌKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第二十卷 目次

東の博士たち		七
あやめ		三
火宅		四
愛の不安		七
燈臺		九
ニオベ		三
聖女		六
魔神禮拜		七
邯鄲		九

綾の鼓	三九
艶競近松娘	三六
卒塔婆小町	三八
只ほど高いものはない	四三
夜の向日葵	四七
室町反魂香	六三
解題	六七
校訂	六八

三島由紀夫全集 第二十卷 戲曲 (1)

東の博士たち

人物

エロド王 ガリラヤ分封の國守。

千人長 老臣。

マルテキス 中年の外交官。

侍從長

其の他の廷臣たち。高官主だった猶太^{ユダヤ}の官吏。

高官、一、二、三、四。

小姓たち。

東の博士、一、二、三。

舞姫、一、二。(舞姫二、ソバルミナ)

其の他の舞姫。伶人たち。

黑人、エモス。

兵卒、一、二。

祭司長 白髮に埋まつた老臣。

年老いた學者。

其の他の學者たち。

聲、…… 以前の臺詞^{セリモノ}の繰返し。

聲、一、二。

下から聞える高い聲。

下から聞える低い聲。

或る聲。

杳^{ハルカ}い聲。

杳くざわめく聲。

崇高な聲。

舞臺

舞臺は宮殿の一棟の屋上。右手に下からの長い階段が見える。(註階段は内部を通ずるものに
あらず)左手に立派な椅子と、その左右及び周圍には、銀の燭臺があまた置かれてゐる。
どれにも蠟燭が差され、灯があかるくついでゐる。椅子の前に一個の立派な卓子。後部は
低めな繊細な模様の金屬の欄干。背景は宮殿内の數多の屋根、所々に樓(大道具にてもよ
し)。灯がちら／＼と瞬いてゐる。その遠方に城壁が幽かに見え、樹木・森林が黒い影をう
かばせる。その外の廣い空間は、宵の口の夜空で、月や多くの星がこれを埋める。左手に
一つの特に光の強い星が見えてゐる。

聲、一 (階下から聞える様子……この臺詞まで暫くは空舞臺。)王さまが、屋上へ來られるとお前は云
つたね……。

聲、二 わたくしも信じられませぬ。今迄なかつたことを突然なさつて見るのは王様の悪い癖

です。……けれど、わたくしは聞きましたのです。千人長にさう話しておいになつたのを。

聲、一 おまへの云ふことは確かだらうかわからないよ！

聲、二 確かでございますとも、奥様。

——小間——

まあ。あの星は、百萬の燈火の光りのやうです。奥さま、あの星は薔薇水で洗はれた、寶の石のやうに耀いてをりますよ！

——間——。喇叭の音。微かな雑沓の音。）

下から聞える高い聲 まあ喇叭がなりました！

下から聞える低い聲 王さまがお出ましになる。

（階段をのぼつて来る人々の聲音。千人長を先頭にして、王及びその廷臣たち。）

千人長 此處は、大層涼しうございます。……夜風が吹いてをります。銀河の水が、こゝまで流れて来るやうにわたしには思はれますよ。

エロド わしは、餘り暖かさに苦しめられた。燃料を多く用へば、炭火は灰と變らうとも、そなた共の懷は肥されるであらうからな。（侍從長をじろりと見る）

侍從長（肥つた大男。エロドの言葉には氣附かぬ態にて）エザブトの眞赤な葡萄酒と、アビレーンの蒼い葡萄酒を運つて來い。儂が、指圖しておいた分だけだぞ。

（エロドに續いて、高官たち大勢上つて来る。エロドは玉座〔舞臺〕参照〕に掛け、その前の卓子に小姓たち、酒や馳走を運ぶ。その或るものは床几をもつてゐて、それに、高官たちの主だつた幾人かゝ坐る。）

エロド 遠慮なくやつて呉れい。儂は大いに氣分が秀れてをる。

一同 (盃を上げ) エロド陛下萬歳！ ユダヤの君、エロド陛下萬歳！

エロド いや、有難う。——兎も角、儂は機嫌がよい。……蒼い星や、墓所のなかの風のやうな

夜氣が、儂を落着かせてくれるからであらう。さうだ。墓所の空氣は最もおちついたものだ。

それは、總ての畢り^{きは}で、復讐も、更に死それ自身でさへ、飛び去つて了つた後だからなあ。

千人長 陛下。併し時折墓場のなかに入つた後も、屍^{しかばね}のうちから甦^{よみがへ}るものもあると申します。

エロド 否^{いや}！ それは有つてはならぬことだ。そんな事は世のなかにはない筈だ！……そのやう

なことを云つて呉れるな。儂は、珍らしく愉快なのだから。

高官 一星の一つ一つは、陛下の御財寶^{たから}のやうであります。黄金^{こがね}と白金^{しろがね}と又數多の寶の石に滿た

された御財寶藏が、限りなく増されてまゐりますやうに……。

エロド おお。そなたは才人だ、わしを氣に入らせる。わしは一層機嫌がよいぞ。

千人長 星は血ぬられてをります。ですから藏の底には、血が溜つてゐるではございませぬか。

エロド (答へず、マルテクス『人物』参照) に向ひ。) どうだなマルテクス。やはりユダヤがおん身

の故郷であらうが。

マルテクス それはもう陛下。先程も陛下のお手紙を届けにロオマ迄まゐりましたが、やはりユ

ダヤが戀しく思へてなりませぬ。……——羅馬皇帝陛下は、偉大な藝術家でいらせられます。

併し餘り御飾り過ぎになりはせぬかと、わたしは思ひます。皇帝が日頃御常用の御馬車は、一

面の紅玉で出来てをりますが、所々にとりつけた朱色の花形の金具が、まことに氣品^{ひん}をなくし

てをります。程よい裝飾は氣品をもつものでございますが、物は渾^{すく}て飾らぬに越したことはあ

りませぬ。

エロド そなたは頻りに眺めてをつた様子だつたが、新築いたした、城門の裝飾は、……あれはどうだな？

マルテキス (狼狽しつゝ) おおあの御門は陛下の御設計と承りましたが、黄金の表面に浮彫されたフエニキア風の彫繪は、何とまあ壮大な圖樣でございませう。それに、開閉する毎に十八の蝶番が起す美しい音は！ あの造りは羅馬の使者にもわからなかつたさうで、羅馬皇帝もあれを模倣なすることは出来ませうまい。恐らく、世界で最も美しい造りでございませうから。

エロド おん身の目にはそのやうに映つたか。最もよい面から見てくれたのであらう。

……ときにマルテキス。わしは未だ、羅馬の詳かな話を其方にして貰つてはをらぬのだが……。

マルテキス 殊更にお話し申すこともございませぬ。
ロオマの都の面貌が變るときは、その元首の變るときだと申しますから。併し、こゝに注意すべきことがあります。それは、羅馬には帝王崇拜教の勢力が、燃え上る火のやうに盛なことでございます。

エロド 儼はあれには反對だ。大いに反對するぞ！ 並の人間を神と同等に扱ふと云ふことは、神を潰すに足る行ひだとわしは思ふ。

千人長 (半ば、獨白) あの人民たちの申して居る「世の中を動かしその誕生と共に歴史は始められる」といふ男、……「神の子」と呼ばれる男はどこにゐるのでございませう。

エロド (千人長の言を聞き咎め) 黙れ！ そちは今宵、わしの氣嫌を損ふやうな事ばかり喚いとをる、そなたが云ふのは、命を惜まぬやうな言ばかりだ。千人長よ。わしは三百人の刑吏を率ゐる

てゐる。彼等は皆黒人で、涅むだ、粗鐵のやうな色の體をしてゐるのだ。で、儂はあれらに、斬首の役を與へてをる。

若し、儂があれらの手に、一人の廷臣を委ねたならば、餓ゑた狼のやうに、その男の項に刃を當てるであらう。

おお。そちは慄へてゐるな！ わしの言が冗談でないことを知つたからであらう。それに、そなたは非常に蒼い顔をしてをる。……凡て恐怖を示す標ではないか。だが、儂は、……そなたが再び言はうとしなければ、儂は黙つてゐよう。

高官二（亂醉してゐる。盃を手にして——）陛下。この御酒は、大變奇らしく善い味を有つてをります。赤い枝と黒ずんだ實をもつ、ガザの葡萄のやうであります。香いイリリアの國から、金の脚をもつ船に載せて積んで來る價高い麝香のやうな香りがいたします。何處で出來ました。エロド それか？ それはアビレーンの國守である、弟のルサニテから送つて參つたものだ。さうだ……思ひ出したぞ。大層な自慢の手紙を、使ひの者がもつて來たのだ。

この酒は、紫水晶の小山から沛れ出る光つた水と、その山の頂きに咲いてゐる深紫の大輪の花を原料にして釀し、十年の間、百尺の地下の酒藏に貯へられたものださうだ。

それで美しいのだらう。アビレネの紫水晶の冷やかさが、此の酒の中にも滲み透つてをる筈だから。

高官三（ふと空を見、一點を指差して……）御覽なさい！ あの星を。

高官一 あんな鋭い光をもつた星を、わたしは嘗て見たことはありません。

……それに、貴い様子をしてゐる。

マルテキス あの星は瞬かない。非常に靜かに、何かを指差してゐる。あれは極く新しい星です。……星占學者たちに見せたら何といふだらう。——彼等は狂喜するでせう。

高官二 御覽なさい！ ごらんなさい。あの星は動いて行く。

高官一 滑車にのせられた、崇高い女王のやうに動いて行く。

（人々欄干によりかかり、頻りにその星を見んとする。）

エロド 何と申す。星が、星が生れたといふのか。それは極く普通のことだ。それに今日は、これといつて記念すべき日ではない。祭日でもなければ祝日でもない。だが……、あれらは、星の行方ばかり凝視^{みつめ}てをる。これは、故あることに違ひない。あれらは己れの利と職務^{つと}の外には、用のない男たちだし、詩をつくる程のものは一人も居らぬ。

……その彼等が、星の行方ばかりを見守つてゐるとは、容易ならぬことだ。

——千人長！ 千人長。

（千人長きくりとして振り向く。）

申して見い。遠慮は要らぬぞ、そなたは博學だときいてをるから。

——これは、こゝに現はれた様々なしるしは、なんの前兆であらう。凶いことかな？ それとも非常に善い事か。

（近寄る）

千人長 （戦きつゝ）わたしが今朝伺候いたします道々、豫言者の言の成就を待つてをる一人の老人に會ひました。

その老人は、ユダヤ人の王者となるべき人の誕生を待つてをりましたのです。